

# 第5回生駒市総合教育会議 会議録

1 日 時 平成28年1月25日(月) 午前10時～午後0時5分

2 場 所 生駒市役所 大会議室

3 協議事項

- (1) 教育に関するたけまるワークショップについて
- (2) 教育大綱の策定について
- (3) その他

4 市側出席者

市長 小紫雅史 副市長 山本昇

5 教育委員会側出席者

教育長 中田好昭  
委員(教育長職務代理者) 山本吉延 委員 飯島敏文  
委員 上田信行 委員 寺田詩子  
委員 神澤 創 委員 浦林直子  
委員 坪井美佐 委員 レイノルズあい

6 教育に関するたけまるワークショップコーディネーター

奈良教育大学教授 小柳和喜雄

7 関係職員及び事務局職員出席者

教育総務部長	峯島 妙	生涯学習部長	奥畑 行 宏
こども健康部長	上野 和 久	教育総務課長	真銅 宏
教育指導課長	吉村 茂	生涯学習課長	西野 敦
図書館長	向田 真理子	スポーツ振興課長	杉浦 弘 和
こども課長	吉川 和 博	教育総務課課長補佐	藤本 清 夫
教育総務課課長補佐	井上 博 司	教育指導課課長補佐	吉川 祐 一
生涯学習課課長補佐	錦 好 見	スポーツ振興課課長補佐	黒松 裕喜伸
教育総務課(書記)	松井 恵	教育総務課(受付)	土井 智 史

8 傍聴者 11名

○開会宣告

○協議事項

(1) 教育に関するたけまるワークショップについて

教育に関するたけまるワークショップの報告について、教育総務課、井上課長補佐から説明

教育に関するたけまるワークショップを通じて得られたことについて、コーディネーター、小柳教授から説明

(質疑)

上田委員：第2回ワークショップに参加した感想として、市民の方がとても活発で驚いた。一人一人が生駒をより良くしたい、関わりたいという思いを持っていると感じた。また、生駒で楽しい生活を送りたい、そのために自分たちでまちをつくろうという気持ちを感じ嬉しかった。

小柳教授のお話にもあった「共に」が大きなキーワードであると思う。今までの教育では、一人一人がどのように伸びていくかが中心にあったが、これからは多様な関わりを持ち、生駒という場で自分の憧れや希望にチャレンジしたいと思えるまちにしたいと感じた。一人では学ぶことはできない。共に関わることによって、違いを感じるから面白い。変化が起こってくるから面白い。生駒でたくさんの新しい経験をすること、またそれを語り合い表現することによって、新しい学びのイメージが生まれるのではないか。

小紫市長：この後、教育大綱の素案を検討する中で、そのような議論が出るかと思う。私も、上田委員のおっしゃるように、「違いがあるからおもしろい」「多様性を認めて挑戦していく」ということも、大綱のキーワードの一つとして入れるべきであると思う。

坪井委員：私も2日間のワークショップに参加し、皆さんが生駒をより良くしたい、自分自身をより良く生きたいという思いを持っているということを感じ、これは非常に大きな市の力であると思った。

ワークショップの話し合いの中では、小柳先生のまとめのように、自分と他者との関わり、生駒愛というキーワードはどの班にも共通して出ていた。

山本委員：小柳教授のご報告と事務局のまとめを見て、たいへん素晴らしいと感じた。最初は、ワークショップを実施すると意見が拡散してまとまらないのではないかという危惧があったが、そこで出された意見は素晴らしく、自分に偏らず生駒市全体を見た意見が多い。特に小柳教授からのまとめの中で、ワークショップで「戻ってきたくなる生駒」という意見が出て、それを印象深く受け止めた参加者の感想もあり、大変素晴らしいと思っ

た。私が教員として影響を受けた本に、東井義男さんが書かれた「村を育てる学力」という教育選書がある。学ぶことが村を捨てて出ていくための学力になっているのではないかという意味の題名である。奈良県でも過疎化や少子化が言われているが、学力を身に付けた子どもが、自分の町や村で生活せずにはほとんど都会へ出ていき戻ってこないという現状があり、何のための学力だったのかという大きな命題がある。生駒は、職場としては十分な容量はないが、大阪のベッドタウンという色彩が強い。生駒で育って学んで、日本の中核や世界で活躍しながら軸足は生駒にあり、いつか戻ってきて生駒を良いまちにするという思いにつながる事が大事である。私が常に思っていることとワークショップで出た「戻ってきたくなる生駒」というキーワードが重なっていて感動した。ぜひ大綱に生かされれば良いと思う。

小紫市長：他の自治体でも、学力が上がるほど地元に戻ってこないという課題がある。小柳教授のご報告や山本委員のご意見のように「戻ってきたくなる生駒」も大切であるし、同時に「戻ってくるができる生駒」をつくりたい。社会に羽ばたいた子が戻る受け皿を生駒につくりたいと考えている。この点を大綱に入れるかどうかは迷っているが、生駒市として重要な論点である。

飯島委員：市長のお話のように、「戻ってきたくなるまち」と「戻ってこられるまち」が大事であると感じる。私が育ったまちは、戻りたいが戻ることが困難なまちになりつつある。バスや電車の便が悪く、採算の取れない路線は廃線となっており、例えばタイヤした後にはふるさとに戻ろうとしても、交通弱者である高齢者は住みたくても住めない状況である。このようなさびしい状況にある自治体は日本に多いと思う。生駒は「戻ってきたくなるまち」と「戻ってこられるまち」の両方の価値を合わせ持っていると思う。他の自治体に比べ若い世代も入ってきているし、大都市に近いので生駒に住みながら都会に通うという選択肢もある。学校教育の中で生駒の自然や歴史を学び、生駒に戻ってくる価値を感じると共に、戻ってこられるまちを持続することを考えていけば良いと思う。

小紫市長：物理的に生駒に戻って住むという形だけでなく、生駒に戻らなくても生駒に貢献する方法があるかということも検討したい。

寺田委員：長年幼児教育に携わってきた観点から意見を述べると、「戻ってきたくなる生駒」という点は、小さいころの原体験に一番左右されると思う。幼稚園では、地域のおじいさん、おばあさんといろいろな体験をし、人の優しさを知り、その中でさまざまな人を愛する子どもを育てている。そのような地域の教育力をこれからもずっと進めていきたい。また、この取組を大綱にも大いに取り入れてほしい。

小紫市長：寺田委員のおっしゃるように、生駒は、幼稚園の中の交流だけでなく地

域や小中学校との交流があり、多様なかわりがある教育をしていただいている。さらに拡大することも必要な方向性であると考えている。地域での教育については、具体的な取組や施策でも検討していく。

## (2) 教育大綱の策定について

関係者ヒアリングのまとめ及び奈良県教育振興大綱（素案）について、教育総務課、真銅課長から説明

生駒市教育大綱（素案）について、小紫市長から説明  
(質疑)

神澤委員：原案の策定に当たって、10代から20代の子ども達の意見はどのくらい反映したか。

小紫市長：ワークショップには若い世代も何名か参加していただき、活発に議論していた。この素案にも彼らの意見が入っている部分もある。委員の皆様自身の考えももちろん反映したいが、次回の会議までに、若い方の意見も含めてお話しいただきたい。今後は、パブリックコメントなどでも意見を集める予定である。

浦林委員：ワークショップの報告では、10年後の理想を目指しての意見がまとめられていたが、大綱の期間は策定から4年間としている。具体的にどの時点から始まるのか。

小紫市長：大綱は最終的に平成28年6月頃に策定したいと考えているので、そこから4年間ということになる。

浦林委員：教育大綱の素案には、さまざまな目標が提示されているが、疑問点が多くつがある。まず、基本方針2に「全国トップレベルの学力を維持・向上し」とあり、その内容では学習塾との連携に言及されており、4ページには「全体的な底上げとトップ水準の引き上げを同時に達成する。」とある。実際に、学校と塾等の民間機関との連携をどのように考えているか。子育てをする母親は、ワークショップに出ていた子育て目標のような理想像を持ちながら子育てや地域活動をしているが、子どもの学力・偏差値や将来どの大学に行くかも大事で、学校よりも塾で学力を上げているのが現状である。入試制度の改革により、点数を取れる子供ではなく考えられる子どもを育てるという話が出ているがまだまだ先のことであり、大綱の期間であるこの4年間を考えたときに、各家庭で望まれるのは高い学力ではないか。教育費にお金がかかり、働きに出たり二人目三人目をあきらめる家庭も多い中、学力保障を学校でやってくれたら助かる。素案には、学校教育に塾のやり方を取り入れるという内容があるが、民間の手法を取り込む意思が本当にあるか。

小紫市長：ワークショップのテーマ設定に当たって、あまり設定が遠すぎると現実感がなくなるため、10年後の生駒を予想して話し合った。大綱の内容

としては、10年から20年後を想定しながら、この4年間で具体的に何をするかというイメージである。学習塾や地域スポーツクラブ、大学との連携については、浦林委員のようなご意見をもっといただきたい。例えば、学習塾のやり方を放課後授業に取り入れる事例も聞くが、どのくらい効果が出ているかも検討する必要があると思う。また、この件はもっと先に議論すべきもので大綱に入れる内容ではないというご意見もあるかもしれない。ここに挙げているのはあくまで素案としての問題提起であり、学習塾との連携についての文言がないといけないということではない。どのようなやり方が良いかについて、現在、具体的なプランはないので、この資料にとらわれずご意見をいただきたい。

浦林委員：8ページに、「スクールボランティアや学びのサポーターを活用した教育支援、環境活動、課外活動等の取組を進め、子どもたちの学習環境を整える。」とあるが、スクールボランティアはあくまでもボランティアとして活動していただいているのに、便利に書き過ぎであると思う。学力向上の効果を保証するなら、質の保障と報酬について考え直す必要があるのではないか。

レイノルズ委員：この素案は幅広く網羅されているが、これから具現化する上で、共感できるための分かりやすさが必要である。浦林委員の意見にあった学力の問題について、最近では大学名を伏せて採用面接を行うところもあり、どこの大学に入るかよりは社会を生き抜く力が必要になっていると感じる。与えられた問題を解くだけでなく、問題を発展させる力の育成が大事だと思う。同じ基本方針を見ても、考えることはいろいろである。委員の多様な意見を反映させての大綱であると思うので、自分の意見や皆さんの意見をバランスよく考えたい。

上田委員：大綱をつくる際の提案として、インパクトとオリジナリティがあった方がおもしろい。4年後の生駒がどうなっているかという具体的イメージを持たないと、どう変わったかが分からない。例えば、何かプロジェクトを街中でやってみるのはどうか。4年後は、子ども達が情報発信し、仲間でプロジェクトを企画実施し、そのプロセスをディスカッションし合っている学びの風景が実現しているかもしれない。ポイントは2つあり、1つ目は、教育観・学習観を本質に据えて大綱を考えること、2つ目は、その理念を社会化するための仕組みを作ることである。4年間で成果が分かる具体的な目玉をつくと良い。

小紫市長：基本方針を1から10まで設定したのは少しよすぎたかと思うので、メリハリを付ける必要がある。また、具体的に関西一、日本一とは何かについても考える必要がある。上田委員のご意見のように、アウトプットを重視するというのは分かりやすいキーワードである。図書館で行っているビブリオバトルなどは、アウトプットの具体的イメージであ

る。生駒らしいインパクトやオリジナリティをいかに出すかが課題である。

浦林委員：先ほどの意見の補足として、学力を大事にすることだけを強調したいのではなく、中学3年の受験生の子どもを育てた保護者の立場から、受験に偏差値が必要ということを経験して感じたことから出た意見である。

小紫市長：浦林委員のご意見は理解しているつもりである。生駒市を教育で選んでもらえるまちにしたいと申し上げたが、そのほとんどの部分が学力であると思う。一般に学力が重視されているのであれば、社会で生き抜く力がどこまで響くかという心配はある。生駒は学力の維持向上についてのテーマを押さえながら、その先も考えているというところを大綱で示したい。浦林委員のご意見のように、目の前の学力も大事である。

小紫市長：今回は素案に対する意見をいただきたい。生駒のオリジナリティある大綱にするためにご意見をいただきたい。

### (3) その他

総合教育会議のスケジュールについて、教育総務課、真銅課長から説明  
(質疑) なし

### ○閉会宣告

午後0時5分閉会